八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和４年４月）　回覧

８．八幡小学校校歌（祝：創立 150 年）

我々が御世話になり、子や孫が通う八幡小学校（今年創立 150 周年）の校歌には、前月に取り上げた「八幡の藪知らず」が含まれています。（歌詞は三番まである中の一番）

「**吾等が上の青空は、鳥鳴く　鳥鳴く　朝の晴れ。今日も　勉めむ。わが友よ。吾等もいつか、智慧すぐれ　八幡の　八幡の藪の如　才量りなき身とならむ**」

出口に迷うほど奥が深い「藪知らず」のように、計り知れないほどの才能を身に付けて欲しいとの趣旨ですが、我が身を省みると忸怩たるものがあります。

この校歌が生まれた経緯を近くの自治会長が御存じであり、この方の貴重な御話と『校歌は生きている』（市川市教育委員会編）からまとめると次の通り。（在校生が去年 10 月にまとめた「秘められし 149 年の歴史」にも校歌の話が掲載されています）

八幡小が創立 80 周年を迎えようとしている時に、当時の高橋厳校長が「これを記念して校歌をつくりたい。できれば**折口信夫**先生にお願いしたいが」と述べられた。このことがＰＴＡ役員の間に伝わり、伝手を求めて依頼することになる。

ＰＴＡ総務部長であった女性役員（お話を伺った方の御母堂）がもう一人の女性ＰＴＡ役員と 2 人で折口信夫先生の元に作詞依頼に出向く。時に折口先生は 63 歳であった。題材を求めて八幡や菅野などの学区を巡られたのは昭和 25 年 10 月のことである。

詞が出来た後に折口先生から「作曲者の宛はあるのか」と尋ねられる。「まだ何も」と答えると、先生から**信時 潔** 先生（東京芸術大学の教授で、名曲「海ゆかば」の作曲者）を紹介される。両先生への謝礼は記憶が定かではないのだが、併せて 8 万円か 13 万円と聞いた覚えがある。当時としては大金で、ＰＴＡにもそれだけの金額の用意は無く、校庭で有料映画会を催し、その入場料と、度々開催したバザーの売り上げ利益なども活用し工面した。そして依頼から 2 年後の昭和 27 年 9 月、創立 80 周年を前にして発表会が行われた。なお折口先生はこの校歌発表の翌年の昭和 28 年に 66 歳で逝去される。高橋校長も完成した校歌を聞くか聞かないうちに逝去された。

折口信夫は國學院と慶応の両大学の教授を勤め、民俗学、国学、神道学、歌人（釈 迢 空の名で発表）の分野で業績を上げた巨人であり、私ごときが簡単に紹介できないが、各学問分野から古代の日本人の素直な心性を明らかにしたいと考えた人と思う。**八幡小校歌は『折口信夫全集２７』に所載**されている。（写真は当該全集と新潮日本文学アルバムの表紙）

折口の校歌に対する信条は「徳目をならべたようなものはいけない。いつまでも生徒が口ずさめるような、楽しいものでなくてはならぬ」というものであったと記載されている。

なお昭和 27 年の国家公務員行政職の月額初任給は 7,650 円である。平成 30 年では 207,900 円と約 27 倍である。当時の 8 万円は現在の 217 万円である（13 万円だと約 350 万円）。折口はこのような謝礼金から 50 万円程を母校に寄託し、恩人の三矢重松（国学者）を称える賞に用いたいという意向があり、没後、國學院大學は「三矢博士記念賞」を設定し、新国学の興隆に資すべき優秀な研究業績をあげた卒業生に授けている。

信時潔の『海ゆかば』は、万葉集における大伴家持の長歌の一部を歌詞として「海行かば水漬く屍　山行かば草生す屍…」と歌う荘厳な鎮魂歌である。歌詞の一部に”大君”があり、戦時機会音楽として嫌う人もいるが、それを言うなら『君が代』もそうである。

当時のＰＴＡに感謝して、この校歌を大事に歌い継いでいただきたい。